

前田哲平さん

(ワードローブ代表者)

好きな服を自由に選んで着る楽しさを

着たい服を選んで着る。そんな当たり前と思えることが、病気や障害があるために困難な人たちがいる。前田哲平さんはそうした人の声に耳を傾け、すべての人が服選びを楽しめる社会を目指して奮闘している。

自由に服を選べない人がいる！

——障害や病気を抱える人々が健常者と同じ選択肢の中から服を選び、ファッションを楽しめる社会づくりに取り組んでいると聞きました。なぜそうした活動を始めたのですか？

きっかけは、以前勤めていたユニクロで、たまたま聴覚障害がある社員と知り合ったことでした。その人を通じて障害がある人たちと話をする中で、服についてさまざまな不自由を感じていると知ったんです。

「前」のことだと思っていました。障害がある人とはほとんど接点がなかったこともあり、服を自由に選べない人がいること、ファッションの楽しさを味わえない人がいることに気づけずにいたんです。それがわかったときは大きな衝撃を受けましたし、洋服屋として自分自身に納得できませんでした。

そこで、まずはどんな悩みがあるのかを把握するために、障害や病気のために服で不自由な思いをしている人たちへのインタビューを始めました。知り合いの



まえだ・てっぺい 1975年福岡県生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。福岡銀行を経て2000年にファーストリテイリングに入社し、ユニクロの店舗運営、商品計画、経営計画、EC運営などに従事。障害や病気を抱える人々のファッションニーズに応えるため、21年株式会社ワードローブ設立。

つてを頼って紹介してもらったり、SNSで障害者の洋服に関する情報を発信している人自ら連絡したりして直接会って話を聞いたん

たとえば、「色やデザインが気に入っても着脱が難しい」「着られるタイプの服が限られてしまう」「障害者向けのオーダーメイドの服はあるけれど値段が高い」といった洋服そのものに関する悩みはもちろん、店舗の構造や試着室などの設備がバリアフリーになっていないため、試着ができないという人もいました。中には、周囲の視線が気になって落ち着かないといった、「心のバリア」のために買い物に出かけることにすら消極的になってしまう人もいました。

私はそれまで、多彩なデザインやカラーの中から好きな服を自由に選び、シーンに応じて装うのを「当

です。

ときには買い物に同行させてもらって一緒に商品を見たり、そこで服を試着してもらったりしました。さらに、障害者の皆さんとの座談会を開き、大規模なアンケートも行いました。最終的には、アンケートを含めて八〇〇人以上の人から服の不自由さなどに関する情報をいただいたことになりました。

——そうした活動はユニクロ社員として取り組んだのですか？

インタビューはあくまでプライベートな活動として仕事の合間を縫って続け、収集した情報をSNSなどで発信していました。でもそのおかげで、私の活動を知っていた上司が、子ども用の前あきインナーの開発チームに推薦してくれて、障害のある子どもでも着脱しやすい、いわゆるポデイスーツ型のインナーの商品化にも携わることができたんです。

その仕事には大きな手応えを感じましたし、そのままユニクロに残って障害のある人や病気の人のための服を開発するという選択肢もあると思えました。けれども、ユニクロの服を着ている人は日本の人口の10%程度にすぎません。多くの障害者へのインタビュ